

第 11 回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

世田谷学園中学校 高等学校 小川悟一 教諭

参加数 : 6回

受賞コメント

東北地方太平洋沖地震により、多くの方の尊い命が失われたことに深い哀悼の意を捧げ、また被災された方々に謹んでお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を深くお祈り申し上げます。

2010 年度日経 STOCK リーグ「NOMURA Award(特別協賛社賞)」受賞に際し、関係の皆様方に感謝申し上げます。また、経済金融教育を通して、よりよい社会の構築の一端を担える人材の育成をめざし、微力ではありますが、さらに研鑽していく所存です。

STOCK リーグ参加の経緯

世田谷学園には政治経済学同好会というクラブ活動があります。中学高校生ですが、ゼミ形式での学習をめざして活動を始めました。工場見学やアンケート調査などを実施していましたが、活動をさらに充実させる方法を模索していました。そんな時、新聞で日経ストックリーグについて知りました。資本主義経済のしくみをしっかりとまたダイナミックに学べると考え、部員に話したところ、興味を示し参加することとなりました。

STOCK リーグの取り組みについて

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

株式市場というと、相場の変動によって利益をあげるもの、というイメージが強いですが、指導にあたっては、投機と投資の違いを十分に理解させることに留意しました。短期的な株式売買を通して利益を上げるのではなく、長期的な株式の保有を通しての、資本主義経済の発展と、個人でもそれに貢献できることを生徒に学んで欲しいと考えました。そのためには、株式売買による利益よりも、テーマ決めに最も関心を持たせる必要があります。新聞のニュースだけではなく、テレビの経済番組や話題になっている新書などもとりあげて、好奇心旺盛な中高生の部員を刺激するようにしました。生徒達もレポート作成のために自作のアンケート用紙をもって果敢に街に出て行くようにもなりました。時にはハラハラすることもあります。あまり口出しせずに見守るようにしています。

参加を終えて

経済・金融に関する研究や学習では、中高生には発表や表彰の場があまりありませんが、このストックリーグに参加することによって、全国の学生と競い合えることが最大の魅力であると考えます。同世代の学生・生徒の優秀なレポートに接することで、生徒たちは、自分たちの研究不足を知ることができ、またそれは励みにもなります。テーマをみているだけでも各チームの苦心のあとやパワーを感じることができます。今後もこのSTOCKリーグを通して、生徒のみならず私自身も経済・金融についてより深く学んでいきたいと思えます。

第11回 NOMURA Award（特別協賛社賞）受賞者コメント

東山中学高等学校 服部義忠 教諭

参加数 : 8回

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

STOCK リーグとのかかわりは、金融関係の仕事をしている友人との会話から始まりました。金融・経済教育の在り方を議論している中で、STOCK リーグのことを紹介されたのがきっかけでした。当時「株」というものをどのように生徒に伝えていくかはかなり悩みました。ただ、正しい投資の意味を理解し、投機的要因との区別をきちんとつけていくためにも、参加させていただきました。レポートの作成の仕方、利潤追求以外の企業の側面などを学ぶことは非常に大切なことだと考えているので、積極的に企業訪問や過去の入賞レポートを読むことから始めました。こうして、我々とSTOCK リーグとのかかわりが深くなって行きました。

STOCK リーグの取り組みについて

9月からの学習期間中に一番気をつけたのは、株価の変動ばかりに気を取られることなく、学習を進めていけるようにすることでした。始めた当時は、デイトレーダーなどの台頭や、メディアの情報は株価についての内容がほとんどで、その要因となっているものに言及されることが少なかったように感じていました。そこで、STOCK リーグ事務局より送っていただいた学習テキスト『Stock

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

Fantasy』、『会社情報』『日本経済新聞』を活用し、テーマも「日本の企業の一押しポイント」に設定して、指導者側が誘導する格好でレポート完成にこぎつけました。

ここ数年は、生徒が自主的に調べられる環境を作り、パソコンをいつでも使えるように自習室に設置したり、9時まで生徒の質問に答えられるように待機したりしています。生徒は、12月頃には、新聞記事について議論したり、企業にアンケートや質問メールを送ったりかなり自主性が出てきたように思います。また、テーマ決定のプレゼンテーション時に、きちんと自分たちの主張を相手に伝える力が付いてきたように思います。

レポート追い込み時期がお正月と重なるため、生徒たちはお互いの家を行き来して、レポート作成にこぎつけたようです。いろいろ意見を出し合い、議論している姿は保護者にも驚きと応援する気持ちを与えたようでした。あと1週でも提出期限が遅いと、ゆっくり吟味できるのですが、最後は微調整程度になってしまいました。

参加を終えて

通常の授業のカリキュラムに組み込んで STOCK リーグに取り組んだため、十分な時間が取れなかったことが心残りです。レポート作成の過程で企業のいくつかの側面には触れることができましたが、もっといろいろなアプローチをかける時間がほしかった気がします。企業の役割・現代社会のあらゆる事象が経済に与える影響・経済の仕組みなどについて、もっと深く勉強を続けてくれることを期待して、これからの日本を若い世代に託していけるようになればよいと思っております。

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

最後に、「NOMURA Award(特別協賛社賞)」という栄えある賞を受賞させていただき感謝の気持ち
でいっぱいです。本当にありがとうございました。

第 11 回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

同志社香里高等学校 藤井宏樹 教諭

参加数 : 8 回

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

本校社会科では昭和 40 年代から「野外調査」などの体験活動を取り入れてきました。私が教員になってからも、「レジャー施設」や「老人ホーム・社会福祉施設」など、毎年テーマを変えて、京阪神奈にある各施設に 5~6 名ずつ派遣して調査させ、レポートを書かせておりました。このような体験活動を入れることで、生徒たちは教室で学ぶ社会的事象やしくみが、実社会といかに結びついていくかということを感じ取ることができ、相乗的に教育効果が上がることも期待できたからです。しかし、選択科目を担当した場合、履修している生徒だけを 1 日校外に連れ出すことは不可能ですので、教室にしながら体験できる「株式投資ゲーム」をしておりました。これは各自が 2 つずつ銘柄を選び、毎日終値をグラフに記録していくというアナログ的なもので、学期に 2 回、銘柄を選んだ理由や株価変動の原因などをレポートにまとめさせておりました。その後、日経 STOCK リーグが開催されるようになりましたので、こちらに移行した次第です。

1999 年度からは起業家教育に取り組むようになり、「会社をつくろう！」や「環境 NGO/NPO をつくろう！」などを実践しました。この授業では、生徒が考えたアイデアに対して社会人のアドバイザーが意見を述べたり一緒に考えたりするワークショップを取り入れたり、「コンビニから社会

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

を見る」や「宅配便から社会を見る」をテーマにした実践では、実社会で働いておられる社員の方々にインタビューに行くなど、さまざまな活動を取り入れました。いずれの実践においても、最終的には社会や企業に対する提言・提案をレポートや企画書にまとめ、プレゼンテーション大会を行って社会人の方にも審査していただくというスタイルを貫きました。他に、ビジネスアイデアコンテストへの応募なども続けております。

STOCK リーグの取り組みについて

基本的には、課題を提示したあとはあれこれ指導することなく、生徒の活動を支援するスタンスを取っています。関連するニュースや情報収集の方法を教えることはありますが、生徒からアドバイスを求められても、「この部分が説明不足だね」とか、「こういうところを調べれば・・・」と返答することが多く、具体的に「ここをこうなさい」と言うことはありません。むしろ私のほうが、生徒たちのレポートを楽しみにしているという具合です。3年生の12月から1月初旬にかけては通常授業が組みにくいこともあって、授業中に最後のまとめをさせることはできませんので、生徒たちは休み時間や自宅に持ち帰って作業しています。「家族と経済や株の話ができるようになった」とか、「親の大変さが少しわかった」、「兄や姉にレポートの書き方を教えてもらった」という感想を書いてくる生徒もいますので、家族のコミュニケーションにも役立っているのかなと思っています。提供していただいている新聞は、毎朝、私が高校3年生のフロアに「配達」し、誰でも閲

覧できるように置いてありますので、私の授業をとっていない生徒も手にとって読んでいる光景を目にします。

参加を終えて

「投資教育」という言葉があります。その是非は抜きにして、STOCK リーグは決して「投資教育」の枠に収まるものではないと考えています。

近年の経済状況や少子高齢社会の行く末等を考えれば、消費者問題や個人資産の管理・運用等に関する教育はますます重要になってきたと言えるでしょう。パーソナル・ファイナンスに関しては、知識として知っているだけではなく、「使える」ようになる必要があります。その点において、日経 STOCK リーグはある程度の効果はあります。しかし、「それだけ」を期待して参加されておられる先生はいらっしゃらないでしょう。特に、中学校・高校においては、経済・社会に興味を持たせ、見る目を養い、社会の構成員として如何に行動すべきかを考えさせるきっかけにしたいと思われているはずです。私もそうです。しかし、そのためには、「企業の役割」にもっと目を向けるべきだと考えています。

私は、企業の存在意義として、「社会に有用な財やサービスの提供」、「雇用の創出と確保」、「納税」の3つが重要であると認識しています。未だに、利潤追求そのものが企業の存在理由であるかのような書き方をしている本も見受けられますが、それは社会に有用な財・サービスの提供を続け（再生産）、雇用を確保し、納税の義務を果たすために必要なことであると解釈すべきではないで

しょうか。メセナなどの社会貢献や、環境保護・国際貢献などを通して行っている社会への提言活動は、その延長線上にあるものです。なぜなら、利益を出さなければ、これらの活動も継続することができなくなるからです。つまり、利潤追求は社会に貢献するための手段であって、目的そのものではありません。

確かに、過去においては、公害問題や「リコール隠し」など、企業活動が社会全体や個人に悪影響を及ぼす問題が多発した時期があります。しかし、その後法整備が進んだことや、エコに興味を持つ消費者が増えて監視の目が厳しくなってきたこと等により、随分改善されてきています。今も、時々報道されるように、利潤追求（あるいは社長や役員の儲け）を第一に考えているとしか考えられないような悪徳業者もありますが、それはごく一部の例外でしかありません。ディスクロージャーやコンプライアンスは、社会に受け入れられるための前提条件ですから、それができない会社は罰を受け、社会から退場を命じられるだけの話です。このような当たり前とも思えることを授業ではなかなか教えられないのですが、日経 STOCK リーグに参加して、生徒が企業研究をするなかで自ら気付くことができるのです。私がこの活動を続けている理由はまさにそこにあります。（ただし、「日経ストックリーグ」は上場企業だけを対象としているので注意する必要があります。）

キャリア教育の観点からも、できるだけ実社会の動きがわかるような体験活動を取り入れるべきだと考えています。そして、生徒に伝えるべきメッセージを間違えないように注意しながら、今後も続けていきたいと思っております。

第 11 回 NOMURA Award（特別協賛社賞）受賞者コメント

東京理科大学 下川哲矢准 教授

参加数 : 8 回

受賞履歴 : 敢闘賞 : 第 4 回、第 5 回 (※第 11 回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

学生たちがパンフレットをどこかから持ってきて、自主的に「出たい」と言い出したのがきっかけです。それまで、ゼミナールでは講義と基本書の輪読による典型的な学習を行っていたのですが、それだとどうしても受動的な学習に終始してしまいます。そこで、アウトプットを練習する良い機会だと考え、ゼミ全体で本格的に始めました。

STOCK リーグの取り組みについて

– 生徒を指導する際、最も留意されていた点は何でしょうか。

学生のモチベーションを持続させることです。STOCK リーグはグループでの参加になるため、どうしても特定の学生に負担が偏ってしまいがちになります。どのようにグループ全体でのモチベーションを維持するかを毎回考えています。やはり、これができたグループの成績が良いようです。

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

– STOCK リーグに取り組んでいる間、生徒のみなさんにはどんな変化があったでしょうか。

レポートの書き方や考えの伝え方が、上手くなったと思います。また、2,3 学年で STOCK リーグに参加するため、4 学年で行う卒業研究の質が明らかに向上したと思います。

– STOCK リーグへの参加中、最も印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

数年前まで、締め切り直前になると研究室に遅くまで残ってワイワイやっていました。徹夜でがんばる学生も多くて、見直しました。

参加を終えて

まず第一に、学生の就職活動に役立っていることです。特に金融系を希望する学生は、面接において STOCK リーグでの経験を話しているようです。第二に、幼いながらもレポートを作ることで、研究の楽しさに目覚める学生が多いことです。大学院に進学を希望する学生も毎年数人おりますし、上記のように卒業研究のレベルが向上しました。第三に、グループワークを行うため、ゼミナール内でのコミュニケーションに役立っていると思います。手間もかかりますが、リターンも大きいと思います。株式投資というと、「お金儲け」という印象が強いですが、STOCK リーグの審査はポートフォリオのパフォーマンスについてではなく、企業評価のレポートについて行われます。その意味で、経済・経営の学習には最適だと思います。

もうすでに多くのリターンを STOCK リーグからはいただいておりますのに、今回、さらにこのような賞をいただきまして、大変恐縮に思っております。最後に、STOCK リーグの今後のご発展をお祈り申し上げます。またこれまで STOCK リーグに参加してくれた学生たちに感謝したいと思います。

第 11 回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

横浜市立大学 中條祐介 教授

参加数 : 8 回

受賞履歴 : 審査委員奨励賞 : 第 7 回

敢闘賞 : 第 8 回、第 10 回 (※第 11 回以前の受賞履歴を掲載しています)

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

私の勤務校ではゼミナールが 2 年生からスタートします。そして私のゼミナールでは 2 年生と 3 年生は学年ごとにいくつかのグループを作り、そのグループごとに課題を見つけ、レポートを作成・報告します。4 年生については個々人で卒業論文を制作するという学習スタイルを採っています。このスタイルは現在も続いているのですが、学年が進行するにつれ、グループワークの進め方がかなり上手くなります。しかし、学年ごとに作業を行っていることで、上級生が身に付けたノウハウが下級生に伝承されることなく、消失していることをもったいなく感じたことがそもそものきっかけでした。

そこで、上級生が身に付けたグループワークを円滑に進めるためのノウハウを下級生に伝えるとともに、上級生が下級生のメンターや教師として行動するトレーニングの場を設けようと考えました。その際に、何か共通の目標を設定した方が良からうということで学生たちに提案してもらいました。学生たちからの提案が、STOCK リーグだったわけです。コンテスト形式であるため、競争心が湧く

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

ことと、私のゼミナールの主題が会計学でしたので、これまでに学んだ知識を活用して、現実の株式市場でどのように活用できるのかを学ぶ場として参加させていただくことになりました。

STOCK リーグの取り組みについて

上級生にはプロジェクト・リーダーとして全体のマネジメントを期待しているので、まずは彼らの自主性に任せるということです。その自主性にいかに火をつけるかという点がポイントと考えています。プロジェクトの進め方としては、夏休み前までに各グループの基本的な方針を報告してもらいます。その際に、関連する情報やデータなどがあれば提供しますし、企業の方とのお付き合いで教えていただいた企業の悩みについて問題提起することもあります。

学生たちは夏休み中に初稿ともいえるドラフトを作成しますが、夏休み明けの発表会で最初の叩きを行います。ここから学生たちは企業にアンケートをお願いしたり、私も知らなかったデータベースを見つけてきたりと積極性が増していきます。テーマだけではなくアプローチも含めて、他のグループが手をつけていない独自性を評価してあげるよう注意しています。

参加を終えて

主催者の意図とは異なるかもしれませんが、ゼミナールの学年を超えた関係が密になっていくことと、リーダーを務めた学生がたくましくなっていくということが参加する最大のメリットです。また、ここ数年間継続して参加させていただいているので、卒業生と現役学生との交流の場において、

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

「STOCK リーグのテーマはなに？」ということで会話が成立するので、彼らの会話のきっかけにもなってくれています。

また、毎週のゼミナールの時間では、会計や財務の勉強をしているので、勢い株価に与える重要な要素として会計情報を中心に考えてしまいがちになります。しかし、STOCK リーグのプロジェクトで、時系列的に株価を追うことで会計情報以外の重要な情報もたくさんあることに気づいてくれるようです。そして、それが会計以外の分野でも自分の知識を拡げていこうという動機になってくれていることも参加のメリットと考えています。

このように、STOCK リーグは、企業と情報と株価という学生にとってのブラックボックスを、リアリティをもって理解させてくれる上手い仕掛けだと思います。

第 11 回 NOMURA Award (特別協賛社賞) 受賞者コメント

天津外国語大学・淮陰師範学院 小野寺健 教授

参加数 : 11 回

(※河北大学、曲阜師範大学清華大学、大連海事大学、大連大学、中国人民大學、天津外国語学院、南開大学、北京外国語大学、北京第二外国語学院、淮陰師範学院より参加)

受賞コメント

STOCK リーグ参加の経緯

- STOCK リーグに参加した契機は、帰国した折、偶々「日経 STOCK リーグ」参加募集の紙面を、拝見したことです。なお、参加要件として、日本国内との条項がありましたので、主催者に事情をお話して、特に参加を許された経緯があります。
- 参加の狙いは、中国経済が急激に発展する中で、「間接金融」から「直接金融」への移行は、時代の流れであり、社会のニーズに対応した人材育成が、大学の責務と考えたからです。
- 参加する前は、日本経済新聞の「経済教室」などをテキストとして用いましたが、理論を検証する「手段」が無かったので、日々変化をする「ポートフォリオ」の成績は、学生に大いなる意欲を、喚起したようです。

STOCK リーグの取り組みについて

- 学生を指導する際は、当然入賞を目指して取り組みますが、学生の自主性を最大限尊重しており、結果よりは、その過程を重視しております。

<http://manabow.com/sl/result/index.html>

- STOCK リーグに取り組むことにより、チームワークの大切さを自覚し、新たな友情が芽生えるなど、学問以外の成果も、大いに上がっております。また、資料の収集や情報の検証を通じて、「ブランド」のみに依存しない企業評価手法が、徐々に定着してきました。
- 参加中、印象に残っていることとしては、応募レポートを武器に、大学院進学や日系企業就職を実現させた学生が、複数いることです。

参加を終えて

- 参加の醍醐味としては、北京第二外国語学院卒の三井物産に就職した学生から、大学生活の中で一番印象深いのは、「STOCK リーグ」の学習との発言や、指導した学生とは、卒業後も緊密な関係が、続いていることです。
- 取り組みで、苦労したのは、当初中国の大学では、インターネット環境が整わず、北京外国語大学で指導した時は、学生の資料収集とレポート作成のため、デスクトップパソコンを一台寄贈したのですが、学生は自由に使えず、教師用に転用されたという「笑い話」を、後日聞かされました。
- 中国で日本語を学ぶ学生や教師の中で、STOCK リーグへの参加希望は、相当数ありますが、指導する教師の力量不足や教材の不備が顕著なので、中国日本語教学研究会との連携を深め、時代の一歩に対応した「複合的人材」を、今後も育成したいと考えております。